

<実践報告>

## 信州大学教育学部附属特別支援学校における オンライン教育実習に関する報告

上野 大 信州大学教育学部附属特別支援学校

戸谷健史 信州大学教育学部附属特別支援学校

原 洋平 信州大学学術研究院教育学系

### A Report on Online Teaching Practice at the Special Support School Attached to the Faculty of Education, Shinshu University

UENO Dai: Special Support School Attached to the  
Faculty of Education, Shinshu University

TOYA Kenji: Special Support School Attached to the  
Faculty of Education, Shinshu University

HARA Yohei: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	オンライン方式で実施された令和3年度特別支援教育実習の実践を報告する。また、オンライン教育実習を通して得られた成果と課題を整理し、今後の特別支援教育実習のあり方を再考する。
キーワード	オンライン教育実習 特別支援教育実習 授業配信 ICT活用
実践の目的	特別支援教育の意味や内容、方法を学ぶとともに、障害のある児童生徒に対する支援のあり方や教育者の姿勢、使命感を感じ得ること
実践者名	信州大学教育学部附属特別支援学校教員
対象者	信州大学教育学部生（51名）
実践期間	2022年1月～2022年2月
実践研究の方法と経過	オンライン教育実習の実施方法（事前準備、授業配信の方法など）や実習期間を通して見られた実習生や児童生徒の具体的な姿、事後アンケートの記述などから成果と課題を整理し、考察する。
実践から得られた知見・提言	オンラインでの観察や実践、リフレクションを通して、目の前にはいない児童生徒に思いを寄せ、実態把握や授業づくりなどを行おうとする姿が見られた。そして、特別支援教育実習において、目の前の児童生徒と対決して関わるからこそその学びや児童生徒の思いに目を向けられるようになっていく過程を大切にしていきたいことを改めて認識することにつながった。

## 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、令和2年8月下旬から9月中旬にかけて信州大学教育学部附属特別支援学校（以下、附属特別支援学校）において実施する予定であった令和2年度特別支援教育実習は途中で中止となり、実習期間後に代替プログラム【オンデマンド型（講義動画・授業動画の視聴）と双方向型（教員との意見交換など）を組み合わせたプログラム】という形で実施された。代替プログラムを終えた学生に実施したアンケートには、「代替プログラムでしか学べないことも多くあった」、「動画をじっくり視聴することで分かる教師の具体的な支援や目線を追うことができたと思う」など、代替プログラムでの学びを前向きに捉える学生がいる一方で、「子どもとの関わりや授業を実際に経験してみたかった」、「具体的な支援や補助具の作成についてもっと詳しく学びたかった」などという感想もあり、体験的な学びという点では課題が残った。

令和3年度は、教育実習時期の最適化に向けた移行期であったため、令和3年8月下旬から9月中旬にかけて4年生を、令和4年2月に3年生を受け入れることとなった。4年生については、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていたため、様々な制約はあったものの対面方式にてなんとか実施することができた。しかし、その後再び感染が拡大し、長野県においてまん延防止等重点措置が適用され、3年生については、実施方法の変更を余儀なくされた。実施方法の変更が決まり、すぐに実施方法について検討を行った。検討の際に話題に上がったのは、附属特別支援学校の児童生徒の姿や授業に触れ、限られたなかでも学生が体験的に学ぶ機会を設定できないかということであった。そこで、令和2年度の代替プログラムの反省も踏まえ、実習生と児童生徒および教員が少しでも関わり合えるような機会を設定したいとの思いから、オンライン方式での実施に挑戦することにした。

本稿では、附属特別支援学校においてオンライン方式で実施された令和3年度特別支援教育実習の成果と課題を整理し、オンライン教育実習の可能性を探るとともに、特別支援教育実習の意義を明らかにすることを目的とする。尚、執筆にあたり1, 4, 5章を上野が、2章を原が、3章を戸谷と上野が分担し、全体の構想・考察および構成は執筆者全員で行っている。

## 2. オンライン教育実習の概要

### 2.1 実施方法や実習内容の検討

まず、実習期間（令和4年2月8日～22日：10日間）、タイムテーブルについては当初の計画通りに行うこととした。実施にあたり、オンライン方式となっても達成したい特別支援教育実習のねらいを、①特別支援教育の意味や内容、方法を学ぶこと、②教師としてのものの見方、考え方、豊かな心情、専門職としての資質や能力を身につけること、③障害のある児童生徒に対する支援のあり方や教育者の姿勢、使命感を感得し、特別支援教育を実践するにあたっての自己の課題を見出す契機とすることとし、ねらいを達成するために実習内容の検討を行った。

まずは、実習生と児童生徒がオンライン上で関わりがもてるようにすること、また、実習生が児童生徒の実態を基に授業構想（支援の計画、教材づくり）を行えるようにすること、さらには授業の様子を基に実習生と教員が意見交換できるようにすること、これらの内容を実現するための実施方法を模索した。

具体的には、Web 会議システム（Zoom）を使用して、児童生徒の日常生活や生活単元学習の様子を配信し、実習生は自宅や教育学部講義室（通信環境に制限がある実習生に教室を提供）から入室して、観察・授業実践を行った。また、児童生徒下校後には、教員による事後指導、授業に関わる意見交換の時間も確保した。画面を長時間凝視していると負担がかかるため、観察の合間に意図的に自主研修の時間を設け、目を休めるのと同じ学級に配属されている実習生同士で意見交換をする時間とし、コミュニケーションが取れるような工夫も行った。

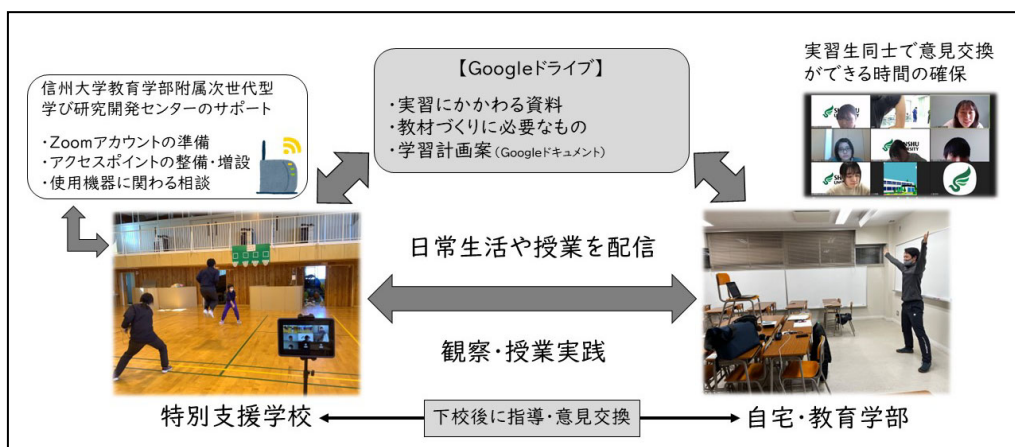


図1 オンライン教育実習の概観図

## 2.2 授業配信における課題と工夫

続いて、生活単元学習における児童生徒の姿をどのように実習生に配信すればよいか、またどのように配信されているかを確認するために、オンライン教育実習前の一週間を試行期間として設定し、実際に校内に配信し合いながら検討を行った。実際に授業を配信し、画面越しに観察をすると幾つかの課題が明らかとなった。

### (1) 小学部の授業配信における課題と工夫

小学部では、遊びを中心とした生活単元学習を行っており、児童および教員が遊び場を動き回るため観察しづらいこと、またその状況の中で画面越しに児童と関わりをもつことが難しいこと、さらには、児童と教員の声や足音、音楽といった音が入り乱れるために音声が聞き取りづらいという

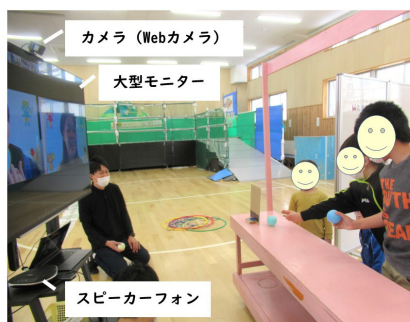


写真1 小学部の授業配信の様子

ことが明らかとなった。

改善を図るため、まずは活動場所全体が観察できる位置にタブレット端末を設置し、児童の大まかな動きを観察できるようにした。さらには、動きの少ない遊び場の前にもう一つカメラ（Webカメラ）を設置し、動画を配信することで児童の表情や動きを詳細に観察できる状況を作るとともに、大型モニターを設置して、実習生と児童がやり取りをしながら活動できるようにした（写真1）。また、音声の問題に関しては、スピーカーフォンを接続し、Zoomのオーディオ設定で「背景雑音を抑制」を低にすることによって、その場により近い音声を共有することが可能になった。

## (2) 中学部・高等部の授業配信における課題と工夫

中学部・高等部では、生活単元学習の終末に計画したお祭りやイベントに向けて必要な物を制作したり、製品を製作したりする場面を主に配信することにした。小学部のように、活動中に子どもたちが激しく動き回ることはないが、まず学級全員で目標や制作の進捗具合を確認する「始めの会」を行い、その後個々の活動スペースへ移動し、活動が終わったら再び学級全員で制作物の出来栄などを確認する「終わりの会」を行うという一連の流れがあった。そのため、同じ教室において画面や音声を複数人で共有する場面と個別にやり取りする場面をオンライン上で円滑に切り替えられるようにする必要があった。

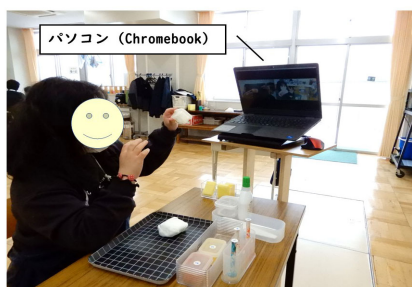


写真2 中学部の授業配信の様子

工夫としては、学級全体で行う「始めの会」や「終わりの会」では、教室前方にメインルームを映した大型モニターを設置し、画面を通して目標や制作工程の確認などを行える状況を作り、複数の生徒と実習生がやり取りできるようにした。個々の活動スペースには一台ずつパソコン（Chromebook）を設置し、制作活動の時間になると実習生は担当生徒のブレイクアウトルームに移動して、画面越しに参観をしたり、支援をしたりできるような状況を設定した（写真2）。ブレイクアウトルームを活用することによって、担当生徒以外の生徒の声を拾うことが減り、同時に、教室におけるハウリングも無くなり、制作活動の場面では担当生徒の言動に集中して観察することができるようになった。

## 2.3 教育実習に関わる資料の共有や学習計画書の作成について

資料（タイムスケジュールや教育実習の心得など）や教材・補助具づくりに必要な物、実習生が作成した教材や手順表などについては、Googleドライブを活用し共有した。実習生が作成した手順表は必要に応じて教員が印刷して児童生徒に提示する、実習生が考えた補助具は意見交換を通して教員が代わりに作成するといった取り組みも行った。

また、生活単元学習ではチームティーチングで授業を行うため、学習計画書を複数の実習生で協力して作成する必要があった。そのため、学習計画書についてはGoogleドキュメントを用いてGoogleドライブ上で共同編集できるようにした。

### 3. オンライン教育実習の詳細

#### 3.1 オンライン教育実習中の生活単元学習

附属特別支援学校では、子どもたちの日々の活動の姿から学校生活を整えていく教育課程の編成を学校生活づくりと考え、その時期の児童生徒の興味・関心や願いを基に、素材や活動を選定し、その時期にふさわしい生活単元学習を組織している（鈴木ほか1987）。

オンライン教育実習では、主に各学級の生活単元学習を配信するとともに、実践期間には生活単元学習の一場面において画面越しに実践を行った。実際に実施された各部・学級の生活単元学習の単元名は以下の通りである（表1）。

表1 オンライン教育実習中に実施された生活単元学習

部	学級名	単元名
小学部	はな組	はなぐみでんしゃででかけよう
	そら組	おかしのくにであそぼう
	にじ組	にじぐみゲームひろばであそぼう
中学部		あさひの冬祭りを開いて、みんなで楽しもう A組：冬さがしゲーム班 B組：的あてゲーム班 C組：福笑いゲーム班
高等部	A組	「あおぞらメイト」で販売会をし、売上金で逃走中グッズを手に入れて、「進撃の逃走中～高Aver. inふとく冬～」を楽しもう
	B組	かがやき商店の売上金で教育実習の先生たちと楽しんだり、修学旅行で家族や友達にお土産を買ってきたりしよう
	C組	やまなみマートの売上金で、(株)関西ネオン工芸と一緒に学校名の看板を設置して、全校のみんなに喜んでもらおう！

小学部は、テーマに基づいて設置された遊び場で物や人と関わりながら遊ぶ、中学部は、冬祭りを開催するために各学級でゲームや必要な物を制作する活動を行う、高等部は、企画したイベントやその時期における生徒の願いを実現するために、製品を製作して販売会を行い、売上金で願いを実現するといった活動を行った。

#### 3.2 観察期間における実習生の様子

##### (1) 小学部における事例

そら組に配属となった実習生は「おかしのくに」で遊ぶ担当児童の様子を画面越しに観察した。そのなかで、A実習生はBさんの行動だけでなく、視線にも着目し、いつ誰に視線を送っていたのかということを丁寧に捉える様子が見られた。教員との意見交換の場面では、「Bさんは先生が滑り台の上に行くと必ず近寄っていました。そして、背後に立って先生に視線を送り、背中を押そうとしていました。Bさんが自分から他者に関わっていくイメージがあまりなかったのですが、よく観察すると先生と一緒に遊びたいという願いがあることが分かりました」と発言し、観察を通してBさんの実態や願いについて理解を

深める様子があった。

## (2) 高等部における事例

高等部では、主に担当生徒が製品を製作している場面において観察を行った(写真3)。C実習生は、靴下リング座布団を製作するDさんが、座布団の表側を編むときと裏返した後に裏側を編むときとで靴下リングを通す順番が変わるといった複雑な工程に取り組んでいるとき、少し困った表情をしながらも、自分で作業を進めようとしていた姿を捉え、



写真3 観察期間の様子(高等部)

「正確な順番で靴下リングを通し、座布団を編みたい」という願いを推察した。そして、どのような工程で作業を行っているかを詳細に観察するとともに、指先の使い方や左右の手の協調性、視線の動きなどの特徴を捉え、靴下リングを通す順番が視覚的に分かり、自分で順番通りに通していくことにつながる補助具を指導教員と共に考案した。このように、生徒の具体的な授業場面での姿から、特徴を捉え、願いを推察し、支援につなげていこうとする実習生の姿が見られた。

## 3.3 実践期間における実習生および児童生徒の様子

### (1) 小学部における事例

そら組に配属となった実習生は、「おかしのかくにであそぼう」の導入場面で、おかしのおひめさまやおかしのおうじさまに扮し(写真4)、「今日は、おかしのかくににクッキーを置いてきたので集めてみてね」などと呼び掛け、児童たちの期待感を高めるとともに、まとめの会では、「たくさんクッキーを集めたね」などと称賛の声かけを行っていた。児童たちは次第にキャラクターの登場を楽しむようになり、画面越しに、「きょうはどのせんせいがおひめさまなの?」「きょうはなにがあるの?」などと自分から質問する、おかしのかくにの隅々までクッキーを探す、「きょうはこれを見つけたよ」と伝えるなどの姿が見られるようになった。



写真4 導入場面の様子

また、E実習生は、そら組Fさんの日常生活や生活単元学習での姿から、「くすぐり遊びが好き」「平仮名や片仮名、英語などの文字を



写真5 実習生の考えた教材

読むことが好き』『チョコ、こちょこちょ』といった言葉遊びが好き』などの興味・関心を捉え、「おかし」をテーマにした遊び場という世界観を踏まえ、チョコおぼけ（写真5）という教材を考案した。イラストを Google ドライブで共有し、教師が印刷、形にして支援の際に用いた。Fさんは教師がチョコおぼけを手に行っている様子を見て、視線を送ったり、手を伸ばして触れようとしたりした。そのタイミングで教師が、「チョコ、こちょこちょ、チョコ」と言いながらチョコおぼけを手を持ち、Fさんをくすぐると、声を出して笑いながら体をよじった。教師がくすぐりを止めると、Fさんは自分から手を伸ばし、チョコおぼけの文字を指差して、「ちょこ、C、H、O、C、O」と読み始める姿があった。教師も一緒に文字を読むと、「よんで」とまた読んでほしいことを伝えた。

## (2) 中学部における事例

G 実習生は、紙粘土で焼き餅（冬さがしゲームで探す物）を制作している H さんの気持ちに近づきたいと考え、自ら材料を用意し、制作活動の場面において H さんと一緒に焼き餅を制作しながら、感じたことを伝え合ったり、完成した焼き餅を見せ合い、出来栄を確認し合ったりするといった支援を行っていた（写真6）。



写真6 生徒と共に制作する様子

また、「あさひの冬まつり」当日は、多くの実習生が自作した衣装や被り物を身に付けて（写真7）、生徒と一緒にゲームを楽しんだり、作成したスライドを使って生徒と一緒に店番を行ったりするなど、画面越しに冬まつりを盛り上げるにはどうしたらよいか、どう関わることができるかを考え、主体的に参加しようとする姿が見られた。



写真7 あさひの冬まつりの様子

## (3) 高等部における事例

I 実習生は、レジンアクセサリを製作している J さんの「枠にレジン液を流し込んだ後、自分の決めた位置にビーズを入れたい」という願いが達成できるように、用意した材料で繰り返し教材研究を行い、模様をつける工程で J さんがつまずきそうなポイントを実感し、明確に



写真8 補助具の使い方を説明する動画

した上で、そのつまづきを解決できるような補助具を考案した。実際の補助具は、I 実習生のアイデアを基にして、意見交換しながら教員が作成した。さらにはその補助具の使い方を説明する動画を撮影し、画面共有をして説明するという支援を行っていた(写真8)。Jさんは、動画を見て使い方を確認しながら、補助具を操作し、自分の決めた位置に慎重にビーズを入れ、満足した表情でI実習生に報告する姿が見られた。

K実習生は、毛糸を使ってコースターを製作していたLさんとコースターの配色について相談する際に、Google スプレッドシートを画面共有し、実際にその場で色を変化させながら配色やデザインについて相談するという支援を行っていた(写真9)。相談をする中で、自分の発した言葉がK実習生にうまく伝わっていないと感じたLさんは、Zoomのチャット機能を使用して、「悩み中」と入力し、どんな配色にするか悩んでいることを伝えた。チャットに気づいたK実習生が、「じゃあもう少し考える時間を取るね」と声を掛けるとLさんは頷き、安心した表情でどんな配色にするかをあらためて考える姿があった。

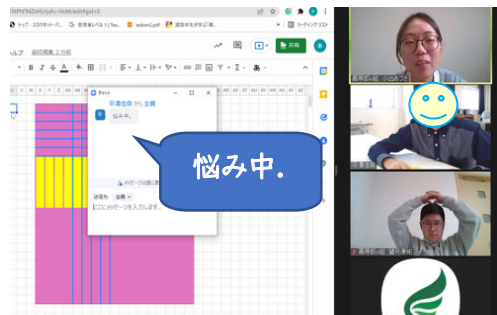


写真9

#### スプレッドシートやチャット機能の活用

## 4. 実践を通して得られた成果と課題

### 4.1 配信場面や配信方法について

オンラインのため、配信する場面を焦点化せざるを得ず、限られた画角の中での観察となったが、観察できる画角が限られていることによって、活動中の児童生徒の言葉や表情、視線、指先の動きなどの詳細を捉えやすくなったという側面もあった。生徒の言動をより詳細に捉えられたことによって、その言動の背景にある生徒の思いや考えにまで目を向けることができたのではないと思われる。当初、画面越しであるため生徒の言動から生徒の実態や願いを捉えることが難しいのではないかと懸念していたが、実習後のアンケートには、「オンラインだからこそ、切り取られる視野に限りがあり、子どもたちの様子を客観的に観察することができた。現地では子どもたちに翻弄され、観察できない可能性があることを考慮すると、オンラインにも長所があると感じた」といった肯定的な感想が複数あった。一方で、「自分が聞きたい音声や見たい場面が見れないときがあり、もどかしかった」といった否定的な感想も多くあり、観察場面が限定されるため、児童生徒の姿を通して生まれる気づきや学びに限界があったことも分かった。しかし、観察したい場面を思うように切り取れないという点に関しては、対面による実施となれば解決される問題であると考えられる。今後は対面による実施が可能になっていくと思われるが、対面で観察をする際にも、切り取る情報を制限して観察する方法を実習生と共有することによって、児童生徒の言動



およびその背景にある思いを的確に捉えることができるのではないだろうか。

また、今回のオンライン教育実習を通して得られた小学部の生活単元学習のような児童が動き回る授業であったり、同じ教室内で、各自が異なった活動を行ったりしている中学部・高等部のような生活単元学習をリアルタイムで配信するための方法や技術というのは、オンライン授業研究会やオンライン参観日、教育実習代替プログラムなどを実施する場合に、より質の高い授業配信を目指して応用できることが見えてきた。音声の問題については、工夫によってある程度改善されたが、不明瞭であったり、途中で途切れたりするなど、聞き取りづらさについては引き続き改善に向けて検討する必要がある。機器の性能や Zoom アプリの機能の向上に期待したい。

#### 4.2 児童生徒の支援や関わりについて

今回のオンライン教育実習では、実習生による ICT 機器を活用した実践や支援の工夫が数多く見られた。3章で示したコースターの配色について相談するための Google スプレッドシートを用いた支援は、その場のやり取りで出てきた色をすぐにシートに反映させることができると同時に修正もでき、生徒が安心して配色についての考えを発信する姿につながっていた。また、動画を用いた補助具の使用方を説明する支援は、生徒の目線に立って撮影され、実際の使用方をイメージしやすくなっていた。また、今回は実際に行われていないが、動画であるとスロー再生ができたり、分からないところを何度も確認したりすることができると思う。今回見られたオンラインならではの支援方法の多くは、対面においても十分有効な支援となり得る可能性がある。

児童生徒との関わりについて、実習後のアンケートでは、「画面越しでも生徒との距離が縮んでいく感じがするのがうれしかった。来年度は実際に会って関わりたい気持ちが強くなった」、「オンラインでも子どもたちと関わって一緒に遊んだり、話したりできてよかった。オンラインでも思った以上に子どもたちとつながることができたと思う」などと前向きな感想が多くの実習生から上げられており、画面越しではあったが児童生徒とつながることができたという経験は、特別支援教育や進路選択を考える一つのきっかけになったといえるのではないかと。一方で、「オンラインではできなかった実際の子どもの関わり方で、教師の体の動かし方や距離感、声の掛け方についてさらに知りたいと思った」、「言葉での表出の少ない生徒さんともっと関わりたいと思った。その場にいなければ分からない空気感を感じたいし、関わりを通して支援について悩みたい」などと、実際に関わることで学びたいという感想も多く見られた。これらの感想から、オンライン教育実習では、実習生が多様な感覚情報を体感として得ながら自分で行動することが欠けており、さらに、実習生が考えた支援を児童生徒と関係ができていない教員が行うため、うまくいっているように見え、実習生が児童生徒との関わりについて悩む機会が少なかったのではないかと、また、児童生徒のことや授業が実習生の中で自分事になりづらい面があったのではないかと、といった課題が見えてきた。

## 5. おわりに

前例がなく、どのような教育実習になるのか全く予想できない状況でスタートしたオンライン教育実習であったが、多くの方の協力の基、何とか実施することができた。

小林(2021)は、教育実習が、実習に臨む学生やその学生を指導する大学等だけでなく、受け入れる実習校や教育委員会にとっても、必要不可欠なものであり、教育実習という科目を持続可能なものにしていくためには、コロナ禍においても様々な対応や配慮のもとに実施された教育実習の経験を生かして、これからの在り方を考えていくことが大切であると述べている。実習生が学校に足を運ぶことができない中で、オンライン上ではあるが授業実践を行う機会を設定したことは大きな成果であったといえる。また、Google ドライブの活用や実習生による ICT 機器を活用した支援などについては、オンライン教育実習に限らず、対面での教育実習にもつながっていきそうである。

今回、多くの教員から、「画面越しであると、どうしても発語のある児童生徒との関わりが主になり、発語や表出の少ない児童生徒の姿や実態に触れられる機会を設定することが難しかった」という声が上がった。特別支援学校に在籍する児童生徒の実態は多様であり、言語によるコミュニケーションだけでなく、非言語によるコミュニケーションが主となる児童生徒も多く在籍している。本来、特別支援教育実習の対象として大切に考えていきたい発語や表出の少ない児童生徒との関わりにおいては、オンラインでは限界があった。特に発語や表出の少ない児童生徒とは相対して関わるからこそ、目の前の児童生徒が何を思い、何を伝えようとしているのかを感じ、どのように応じればよいかを臨場感をもって考えられるのではないかと。そして、多様な実態をもった児童生徒との関わり方について悩み、考え続けることによって、児童生徒との関わりを実習生がより自分事として捉え、児童生徒の思いに目を向けられる教師になっていくのではないかと思う。特別支援教育実習では、児童生徒の思いに目を向けられるようになっていく過程を実習生に味わってもらいたい。

オンライン教育実習を緊急時の対応として捉えるのではなく、特別支援教育実習をさらに充実させるための経験として今後に生かしていきたいと思う。

## 謝辞

本オンライン教育実習は、信州大学教育学部附属特別支援学校全教員の理解と信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センターの先生方のご協力により、実施することができました。心より御礼を申し上げます。

## 文献

小林力, 2021, コロナ禍からの教育実習の在り方に関する研究, 神奈川大学心理・教育研究論集第 49 号, p.45

鈴村金彌ほか, 1987, 子どもと共に創り出す生活一ひとりひとりが豊かに育つ学校生活 子どもたちの心の内をみとって一, 信教印刷株式会社, 長野県, p.45

(2022年9月21日 受付)